

# ハイデガー

木田元  
岩波 1993

## 3. 存在への問い

72

存在とは何か という問いがプラトン、アリストテレス以来西洋哲学が問い続けてきた根本の問いである。では「存在とは何か」というのは、どういうことだろうか。それは、すべての存在者を存在者たらしめている、その存在する というのはどういう意味かを問うことである。

個別的諸科学は存在者の全体のうちから物理現象なり経済現象なり特定の領域を切りとって部分的に研究する。ところが、アリストテレスが「哲学者の学」とか「第一哲学」(プロテー・フィロソフィア)と呼ぶ学問、つまり狭い意味の哲学は、存在者を全体として研究しようというものである。

中世においては「神の存在証明」としてこの問いを独自の仕方でも問うていた。

80

存在とは何か という問いこそ西洋哲学を貫く根本の問いだ。

82

「現存在が存在を了解するときのみ、存在は ある 」

「存在は了解のうちに ある 」

「現存在が存在するかぎりでのみ、存在は ある 」

83

ここで ある は Es gibt であり、Sein ではない。与えられる と読んでよい。存在了解は 存在企投<sup>1</sup> と考えてよい。つまり、存在 とは現存在によって投射され設定される一つの視点のようなものであり、現存在みずから設定したその視点に身を置くと、その視界に現れてくるすべてのものが 存在者 として見えてくる、という意味である。

84

人間も一個の動物であるから、それなりの生物学的環境に生きているには違いない。しかし、人間だけはその時々環境に完全に取り込まれ縛り付けられることなく、そこから少し身を引き離し、むしろその環境を足がかりにしてのことではあるが、もっと広い 世界 に開かれている。こうした人間に特有のあり方を、シェーラーは 世界開在性 と呼ぶ。ハイデッガーは 世界内存在 という概念でこれをとらえる。

85

86

世界 とは、高次神経機能が可能にするシンボル機能によって構成される シンボル体系が 世界 なのである。世界開在性 とか 世界内存在 というのは、人間がそうした 世界 という構造を構成し、それに適応しながら生きる生き方、存在の仕方を指すと考えてよい。このような高次機能によって現存在が現に与えられた環境から身を引くはなすその事態をハイデッガーは 超越 と呼んでいる。現存在は、生物学的環境 から 世界 へと超越するのである。

存在企投 とは、現存在が生物学的環境を 超越 して 存在 という視点を設定し、そこから己の生きているその環境を見なおすことである。

87

こうした 存在企投 、つまり 存在 という視点の設定は、人間が意識的におこなったりおこなわなかったりできることではない。これは人間の意志を超えた出来事なのである。まずそうした出来事が起こり、すべてのものが 存在者 として見えてきた上で、おのれ自身をもそうした存在者の一つとして、つまり人間として意識することになるわけであろう。

88

ハイデッガーが「存在了解が現存在に先立つ」と言うのも、こういう意味である。Dasein とは人間こそ Sein という視点の設定がおこなわれる現場だからある。

89

そうすると 存在企投 というようないかにも能動的作用を思わせる言い方は不適當であ

<sup>1</sup>企投=Entwurf, project

る、いかにもその通りであって、それが『存在と時間』の躓きの石になる。やがてハイデガーは、この事態をただ 出来事 と呼ぶようになる。

92 現存在が現存在として存在するという、つまり人間が人間になるということはそこに現在・過去・未来という時間の場が開かれるということである：「現存在の存在は時間性である」とはこういうことだ。

99 存在 というものが決して存在者に属する何かではなく、人間において生起するある働きだということを原理的に解き明かし、その働きを体系的に解明することが現象論の使命である（ハイデガーのブリタニカ草稿への序文）

#### 4. ハイデガーの哲学史観

124 ハイデガーは、西洋の伝統的存在論の根底に潜む存在概念を規定するのに、時折 現前性  
128 という概念を使う。彼の考えている 現前性 とは、制作され終わって、それ自体で自立して存在し、いつでも使用されうる状態で眼前に現前している ということにほかならない。  
ニーチェは ソクラテス以前の思想家たち のもとには、存在=現前性 というのとはまったく異なる 存在=生成 という存在了解の見られることを明らかにした。

#### 5. 『存在と時間』の挫折

133 第一部第一、二篇：現存在が存在了解の場であり、時間性（=現在のうちに過去未来の差異化  
134 が起こること）が現存在の存在を成り立たせる。

ハイデガーによれば、本来的時間性においては、その時間化はまず未来への 先駆 として生起し、そこから過去が 反復 され、そして現在は 瞬間 として生きられる。

140 近代ヨーロッパにおける物質的・機械論的自然観と人間中心主義的文化形成の根源は、遠くギリシア古典時代に端を発する 存在=現前性=被制作性 という存在概念にあると見るべきだ—とハイデガーは考えていた。もう一度自然を生きて生成するものと見るような自然観を復権することによって人間中心主義的文化をくつがえそうと彼は企てていたのである。

#### 6. 形而上学の克服

151 それは何であるか という問いは、古来 本質存在への問い と呼ばれてきた。そこで問われているのは、そのものの本質的存在なのである。ということは、存在に関して それは何  
152 であるか と問うとき、存在はすでに 本質存在 に限局されている。それゆえ存在との始源の調和が破れてしまう。

157 形而上学 という言葉は、元々はアリストテレスの講義ノートを編集する際に、自然学 (physica) の後に配列された 第一哲学 —狭義の 哲学、つまり 存在 についての議論—のノート群を呼ぶために使われて便宜的な呼称であったが、それが古代末期に、自然（ピュシス）を超えた事柄についての学問、超自然学 という意味に読み替えられ、第一哲学の内容を指す呼称として使われるようになったものである。

158 ハイデガーは1930年代以降、哲学 と 形而上学 をほとんど同義に使っている。つまり、西洋=ヨーロッパの命運を規定した 哲学 と呼ばれる知は、自然を超えた超自然

的原理を設定して自然からの離脱をはかり、自然を制作のための単なる材料におとしめる反自然的な知なのだと考えているのである。

159 本質存在 と 事実存在 の区別の遂行こそが形而上学を成立させたのだとハイデガーは見る。

160 プラトンは制作に当たってつくられるべきものの先取りされた姿を アイデア と呼ぶ。この世界のすべての存在者は、このアイデアに由来する 形相 (エイドス)と、それとは別の由来を持つ質料(ヒュレー)との合成体と考えられている。この場合、質料となりうるものは 自然 (ピュシス)以外にない。つまり、制作的(ポイエーシス)存在論の地平においては、  
161 自然 はもはやおのれのうちに運動の原理を内蔵し、それによって自ずから制作する生きた 自然 ではなく、アイデアに則して構造化される無機的な質料、そのような形相と結びつかないかぎり存在者とはなりえないもの、したがってそれ自体では 非存在者 でしかないものなのである。ギリシア語のヒュレーがラテン語の materia と訳された。超自然的原理の設定、形而上学の成立と、物質的自然観の成立とは完全に連動している。  
162 それと同時に、物事のエイドスによって規定される 本質存在 とヒュレーによって規定される 事実存在 とが区別されることになる。

163 しかし、こういう後世の見解は誤解なのである：ポイエーシスというのは近代的な意味での物の製造などとはまったくことなる。古代ギリシア人にとってポイエーシスとは自然の一ヴァリエーションなのである。プラトンのアイデア論も、存在者は一定のエイドスのうちに立ち現れることによってはじめて当の存在者になると見ているわけであるから、そのかぎりではプラトンは依然としてピュシス的思索の圏内にと止まっていると言えよう。

166 アリストテレスこそが誤解の元をつくった(誤解した)のである。アリストテレスは、宙に浮いている アイデア を地上に引き下ろし、個体的存在者のうちに据え付けるのだが、その際彼は アイデア を 形態、構造(モルフェー)と曲げて解釈し、それを事物に内在するエネルギーのようなものとして捉えた。

167 アリストテレスは師のプラトンの「異国風な」考え方の行き過ぎを巻き戻して、ギリシア伝来の自然的思索の伝統に立ち戻ろうとした、あるいは和解させようとしていた。アリストテレスが ここにいるこの人間 ここにいるこの馬 の在り方を 第一の存在(ウーシア)と呼び、人間一般 馬一般 の在り方を 第二の在り方 と呼ぶのもその証拠である。

169 本質存在 の 事実存在 に対する優位を逆転し、それによって形而上学を克服しようというこの試みはシェリングによって実存哲学(事物の非合理的 事実存在 を問題にする哲学)と呼ばれた。

170 しかし、形而上学的命題の転倒はまた形而上学の命題にすぎない。必要なのは 本質存在としての存在 と 事実存在としての存在 という存在の二義的区分がいかなる存在の命運から生じたのかを問うことであり、そうすることによって始源の 単純な存在 の近みに立つことだとハイデガーは説く。

172 アリストテレスは要するにアイデアに異を立てるために 現実態(エネルゲイア)にとらわれ端緒に立ち戻れはしなかったのである。

173 まとめると：存在 が 現前性(ウーシア)として捉えられ、しかもその現前性としての存在が …デアール と …ガアル、本質存在 と 事実存在 に分岐することによって始源の単純な存在 つまり 自然 としての存在が押しやられ、忘却されてしまう。この存在忘却(Seisvergessenheit)とともに 形而上学 が始まるのである。

175 プラトン/アリストテレスのもとで形成され整備された 形而上学的思考様式 と 物質的自然観 とがその後二千年の間に西洋的思考の伝統として定着し、やがてそれが17世紀に近代的に更新されて、近代ヨーロッパ文化形成の下図となった。

179 ニーチェが「生」の概念を捉え直す一つのきっかけはヘッケルによるダーウィニズムの紹介であろう。

#### 8. 後期の思索—言語論と芸術論

202 「言葉こそ存在の住居である」後期のハイデガーはおもわせぶりなものの言い方をする。  
(言葉を重視するという典型的人文科学的誤謬の行き着くところはそうなるのである。)